

「ことばの教師」に聴く——コミュニティにおける変容，継続性と価値の継承——

今 中 舞衣子

はじめに

本シンポジウムのお話を企画者である間瀬先生からいただいたとき、もともと私は上記のタイトルとは異なるテーマで、ワークショップ形式での企画を実施する予定だった。後で聞いたところによると、シンポジストの安部先生についても同様のご予定であったようだ。しかし、企画を詰めていく過程で、まだお会いしたことのなかったもうおひとりのシンポジスト、菊池先生のご研究内容を知ることになった。菊池先生は、記録された歴史を読むことで、市井に生きた人々の声を聴くという作業を長年にわたり続けてこられたとのことだった。そのお話を聞いて、私はその頃取り組んでいたフランス語教員へのインタビューの試みについてご紹介するのが良いのではと考えた。

1 ことばの教師に聴く

インタビューの対象となったのは、東京で実施されたフランス語教員研修参加者を中心に1990年にスタートした、ペダゴジーを考える会（Péka）というコミュニティである。Pékaはフランス語教育に興味のある人すべてに開かれた自己研修と議論の場で、年6回の例会にそのとき参加したい人が集まってフランス語教育に関するさまざまな議論を行う。運営資金はカンパ

制で、メーリングリストや会誌の発行などの仕事はボランティアの分担で運営されている。

インタビューの目的は、このような自由な形態を持つ *Péka* がどのような変容のプロセスを経ながら今日まで継続してきたのか、そこで共有・継承されてきた価値はどのようなものなのかを知ることであった。これまで文字の形で記録されてこなかった参加者たちの声を後世に残すために、初期の頃から中心的な役割を果たしてきた参加者の面々、さらに近年になって活発に参加している参加者の方々にもお話をうかがった。

インタビューから示唆されたことは、① *Péka* という場が参加者の対等な関係性を重視することをコミュニティの共通意識として内包してきたこと、② コミュニティの継続に危機が生じた際に何度も対話による問題解決をはかってきたこと、③ 参加者ひとりひとりの個の主体性が様々な形で尊重されてきたことであった。以下、今中（2018）からそれぞれの具体例を抜粋して紹介したいと思う。

2 対等な関係性

Péka は、外国語としてのフランス語教育に携わっている人やそれを目指す人の積極的な参加によりその活動が成り立っており、参加者は同じフィールドで活動する者として対等に話し合うというスタンスをとっている。こうした参加者どうしの対等な関係性について、参加者の A さんは次のように語る。

Péka っていうところは、まずご存知のように、代表者がいないんです。で、それって、いい点もあって悪い点もあって、いろいろあるんですけど、なんでいないかっていうと、なんていうかこう、誰かがすごく責任を持つとか、誰かが面倒見るとか、そういう会ではないんですね。みんなが同じ立場

で話したいっていうのが一番の大元の考えなので、だからこの場にいる人は、その仕事のキャリアとか年齢とか、ま男女とか一切関係ありませんよと。でその中で例えばキャリアがあんまりなくて疑問に思ったことがある人はそれを尋ねればいいし、自分の経験に基づいて言いたいことがある人は言えばいいし、でそれに対してまたそれぞれが忌憚のない意見を交わせればいいでしょ、っていうのが元々の考え方なんですよね、Péka の。

経験、年齢や勤務校での地位などにかかわらず意見を尊重してもらえる Péka というコミュニティは、参加する人々にとってとても居心地の良いものに見える。しかし、別の参加者Cさんは次のようにも語っている。

対等というのはもちろん二面性があって、僕たちにどうぞどうぞっていうのはある意味優しさなんだけれど、やっぱり裏返すとそれは厳しさであって、甘えるなど。お前も、要するに私も確かに30年やってきた実績があるかもしれないけれど、お前だって私だって学生の前に立ったら同じ教師だろうと。対等じゃないかと。そこで、僕はまだ経験がないから教えてくださいなんて甘えるなど。対等なひとりの教師として責任を持ち誇りを持てと。

Cさんは、Péka の活動の中に参加者どうしの対等な関係というものの二面性、厳しさを感じとっている。人が集う場において、専門性、経験知、社会的な立場の違いなどによって権力関係が生まれ、それが固定化することは往々にしてあるが、Péka という場においてはそうした権威づけが否定されることによって、参加者ひとりひとりが責任を持った活動主体とみなされていることが分かる。

3. 対話による問題解決

こうした対等な関係性のもとに、参加者は Péka の活動の中で対話を通じた教育実践についての省察の機会を得てきたわけだが、参加者の語りからは、フランス語教育についてだけではなく Péka の運営方針やあり方そのものについても対話による問題解決をはかってきたことが分かった。Péka の活動は1990年の発足以来、常に順風満帆だったというわけではなく、参加者が「閉塞状況」「疲れ」「いらだち」といった言葉で表現するような低調な時期が何度もあったそうである。発足から約10年後に訪れた最初の危機について、参加者の F さんはこう語る。

最初のうちはね、セミナー（注：Péka の前身ともいえる、初期メンバーの多くが講師をつとめていたフランス語教員研修）に出てきた人たちが主だったから、それから *animateurs*（注：上記セミナーの講師）たちも来てたから、〇〇さんとか△△さんとか。なんかこう、ちょっと抽象的な言い方かもしれないけど、話す言語が同じだった。だからこういうことはこういうこととして伝わるってのがあったのね。でそれが、徐々に教育セミナーってのがなくなっちゃって、あとジェネレーションが変わって、世代交代があって、あの、同じ言語を話してないんじゃないかって言うので、しんどくなる？

こうした状況を打破するために参加者たちが行ったことは、例会の活動の中で、対話による問題解決をはかるということであった。参加者の活動報告によると、このとき初めて「会全体の共通言語の再構築を目指す作業」を行ったということである。

その後も、閉塞状況といえるような時期は数年に一度のタイミングで訪れ

た。特に、発足から20年が経った頃は、発表担当者の負担が大きかったことで参加者のモチベーションが下がり、しだいに足が遠のく人が増えるという危機的状況にあったそうである。このときの解決策について、参加者のHさんはこう語る。

今後の*Péka*について話し合うっていう会が持たれて、それは*Péka*の会の中で。でその時に、ま結構、そうやって存続するかしないかっていうふうに話しはじめると、結構多くの人がある会に参加してきて。でやっぱりあの重要、*Péka*みたいな活動は重要だから、続けたいっていうような結論だったんですけど。(中略)でやっぱりこういう会はその場に集まって議論することが重要なので、そっちのほうが、っていうかやっぱりそれが大事だになって。形を、まあそれぞれ負担はあるけれども、時間をとってゆっくりと顔を合わせて話し合うことがやっぱり、こういう場にとっては重要なんだなっていうふうに感じたのはまあ、特にその今言ったような問題が起きて、どうするってなったときにそういうふうに感じましたね。結局はまあ、みんな会って話したいんだなっていう。のが大事で、そこはやっぱり*Péka*としては重要だなんてふうに据えたのでまあ、現在もうまく続いているし、やっぱりそこは重要なんだなっていうふうに再確認した出来事です。

このように、*Péka*はなんらかの「問題」と考えられる事柄が生じるたびに、対話による問題解決によってその継続性を維持してきたことが分かる。現在の*Péka*は新しい参加者も増え、世代交代が進みつつあるが、参加者のEさんは*Péka*の今後について次のように語っている。

*Péka*は、なんか*Péka*がこうじゃなきゃいけないっていうのは特になんじやないかな、と思って。そのときに参加している人たちが、今こういうこと

が必要だ、とか思うものに合わせて、形とか内容とか、を変えていけばいいんじゃないかなと思ってて、またそういうふうにしていかないと、継続していくのもまた難しいのかな、っていう。

4. 個の主体性

最後に紹介するのは、Péka という場におけるひとりひとりの参加者の個人としての主体性についてである。参加者の B さんは自身の Péka への参加のスタンスについて次のように語る。

僕は個人として関わっている部分が多すぎるので、いわゆるコミュニティとしての Péka っていうよりかは、個人の集まりとしての Péka だと思っているので。(中略) 強制力もほんとにないので、忙しいときは全く行かないときもあったし、行きたいときに行ったし。(中略) 僕はすごい個人的なスタンスで Péka に関わってるし、Péka 自体を盛り上げていこうとか Péka に属してるっていう感覚を持っていないので、自分自身の経験でいうと、もっと個人として例会に参加してくれる人が増えるといいなって。(中略) 組織ではなく自分自身として。

B さんはインタビューの中で「個人」として Péka に参加しているということを何度も強調しているが、別の参加者 C さんは個人と個人間の「違和感」や「違い」について次のように語っている。

僕はその場で言われてることに違和感があったら必ず表明するようにしてます。それ違うんじゃないのっていうときは黙ってない。それはなぜかっていうと僕は違いをぶつけてみたいんです。それで返ってくるものを見たい。

Cさんが述べるような、他者との異なりをはっきりと言語化して表明するという態度について、別の参加者Eさんはフランス語教員のアイデンティティと結び付けて次のように語っている。

やっぱり、私たちが持っている文化としては、フランス語を学んだり教えたりする中で、たぶんフランス人の人たちとも関わって、でその、なんていうかいいところとか悪いところとかどっちか分かんないけど、まあ思っていることを言うっていう文化があるんじゃないかなって思って、それは逆にその、いい悪いは別として、日本の「暗黙の了解しかない」みたいな世界だと、なんか「なんで言わなきゃ分かんないんだ」とか、なんか「それは言わなくても分かるよ」みたいな、そういうのとちょっと違う世界で、その価値を共有できるっていうのは、ある意味で誰もがができることではないっていうか、「そういうときは黙ってるもんなのよ」みたいな、ものがないっていうのはすごく大事にしてほしいな、って思って。でさっきのコミュニティとしてPékaがうまくいってなかったときのみんなの対応っていうのは、なんだろう、私は、いいなと思ったんですね。「やめるんならやめよう」とか、そこまで言う人もいたし、「じゃあどうするんだ!」とか、でもなんかそういう思っていることを、「このままじゃやってらんないよ」とか言う人もいたけど、やっぱりそうやって思っていることを言わないと、同じものを、同じ空間を共有していくっていうのは、それがなくてすごく難しいんじゃないかなって思って。

こうした事例から明らかになったのは、Pékaに集う人々が、主体的に議論の場に参加し互いの意見の相違について明確に言語化し合うという営為に価値を見だしており、そうした営みがPékaというフランス語教員コミュニティの活動のベースとなっているということであった。

5. おわりに

今回のシンポジウム「声を聴く，声をしるす」には，「21世紀教養教育考」というサブタイトルがついている。シンポジウムの冒頭で，企画者の間瀬先生から「なぜフランス語教員の声を聴くことが教養教育というテーマに結びつくのか？」という問いの提示があった。この問いに対する応答を考えるにあたって，今回私が紹介した研究には入れ子構造のように二重の「声を聴く」という営為が含まれていたと思う。

一つは，Péka というコミュニティが，その対等な対話を基盤とした関係性構築の中で互いの声を聴き尊重しあうということを，コミュニティの価値として共有していた点である。昨今の教養教育やジェネリックスキルをめぐる議論の中で，市民性形成のための対話と協同や多様性の尊重が教育の目標として語られることも多くなった。しかし，授業という活動の中でそうした目標が具体的にどのような形でめざされているのかについては，まだまだ検討が不十分な段階にある。今回インタビューの対象となった Péka というコミュニティは，制度化されたルールもなく参加するメンバーも流動的である中で，なぜ長年にわたりこうした対話的な関係性を継続させることができたのか。この点についてさらに考察していくことで，教養教育の目標や価値について議論を深めるための示唆を得ることができるのではないかと考えている。

もう一つは，自身も教員である私がフランス語教員にインタビューを行ったという意味での「声を聴く」という営みについてである。本研究を通じ，複数の教員からじっくりと話を聴きそれを記録するという活動を続けていく中で，彼らが行った「語る」という営みは，まさに「歴史を紡いでいく」という行為に他ならないと感じた。そして，それを聴き，しるす者は，紡がれた歴史を受け取り，それを新たな形で継承していく役割を担っている。教養

教育という営みの中にも必ずそうした歴史的な積み重ねが基盤としてあることを，特に表面的な情報の切り貼りが教育・学習の様々な場面で横行している時代にあって，再考する必要があるだろう。

最後に，今回のシンポジウム，そして翌日も続いたシンポジスト間の話し合いを通して気づいたことは，「声を聴く，声をしるす」という本シンポジウムのメインタイトルが，我々シンポジスト3名が異なる分野でありながらも共有している基本的な姿勢のようなものをとてもよく表していたということだった。3名は，それぞれ対象や方法は違えど，他者の声を聴く，ということを中心とした研究を行っている。と同時に，他者の声をしるすこと，そしてそれを解釈することにもなる暴力の存在にも意識的である。大きな声の足元にある小さな声を集めて記録すること，伝えることはとても重要な営みである反面，恣意的なメッセージを発信するための材料としてそうした声を利用されること，わかりやすい結論を出すために対話が打ち切れ語る人の権利が奪われることが往々にして起こってしまう。聴き，しるすことを営む人は，そうした暴力と完全に無関係ではいられない。それでも，「このことについては自分が記録しなければならない，伝えなければならない」という対象に出会ってしまったことが，この困難な営為を続けている理由なのだと思う。

本シンポジウムでは「声を聴く，しるす」のうち「聴く」についての議論が中心となったので，今後の共同研究の中では「しるす」ことについてもさらに議論を深めていくことができると考えている。

〈参考文献〉

今中舞衣子 (2017) 「コミュニティへの関わり方とあり方を問う—当事者意識とアイデンティティ」『キャリアデザインの為の自己表現—過去・現在・未来を結ぶバイオグラフィ』細川英雄・太田裕子 (編著)，東京図書，pp. 167-181

「ことばの教師」に聴く——コミュニティにおける変容，継続性と価値の継承——

今中舞衣子 (2018) 「フランス語教員コミュニティにおける変容，継続性と価値の継承—「ペダゴジーを考える会 (Péka)」に集う人々の語りから」『大阪産業大学論集人文・社会科学編34』 pp. 91-110